彼の岸

終日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼の岸

【Ｎコード】
Ｎ７３６７Ｌ

【作者名】
終日

【あらすじ】
水溜りでこけたと思ったら空中に放り出されていた高校生、朱璃。
落下した先は国を挙げての婚儀の真っ最中で…？
天涯孤独の少女が政が全ての青年皇帝と出会うことから始まる物語。
少女は自分の居場所を見つけることができるのか。
青年は国の為に全てを賭すのか。

1話　弓引く少女

落ちて、落ちて、落ちて、
落下の恐怖と意識が霞んでいく。
私は、どこへ辿り着くのだろう。
一人ぼっちの私は、どこへ

「…お母さん、おはよう。」

シンプルな写真立てに向かって手を合わせ、微笑む。
ベランダの窓からは朝の日差しが部屋に入り込んできている。
マンションの一室はシン、としていて外で鳴く小鳥の声だけが聞こえている。

カウンターの上の小ぶりの赤いお弁当箱をピンク色の布で包み、鞄を取り、カーディガンを羽織る。
荷物良し！髪形良し！服装良し！と点検し、「よし！」と意気込む。
お手洗いの後にパンプスを玄関で履き、居間の方向に向き、

「いってきます」

と行ってドアノブに手をかけた。

その言葉に「いってらっしゃい」という返事が返ってくることは無かった。

鋭い弦を弾く音が木霊し、ダンッと数十メートル先の的の真ん中に矢が突き刺さる。

ふぅ、と止めていた息を吐き出し、番えていた弓を下ろす。

背後で誰かが微かに感嘆の息を漏らした。

弓道部期待の新人、明海朱璃（アケミ シュリ）は長く艶のある黒髪を高い位置で括り、美しい姿勢で並ぶ的を見つめていた。

「朱璃（シュリ）、綾部先輩がさっき呼んでたよ。」

同級生で同じ弓道部所属の美郷（ミサト）が道具を片付けていると話しかけてきた。

まだ袴姿の朱璃とは違い、彼女は早々に制服に着替えていた。

せっかちの彼女は、素早さ重視で着替えたらしく、少し胸元のリボンが歪んでいた。

「歪んでるよ、ミサ。」

ニコっと笑いながら、朱璃は美郷のリボンを直してあげた。

「おっと、すまんすまん。」

照れるように美郷は頭を掻きつつ、大人しくしていた。

「はい、直ったよ。」

「サンキュー！」

照れたような笑いながら美郷はいやーしかし、と話し始める。

「本当に朱璃は気遣い凄いよねぇ。そら男子の人気高いわけだ。」

「…？」

言葉の意味が把握できないと言わんばかりに首を傾げる朱璃。

その様子を見てそしてこの鈍さだよ、と呆れたように美郷は続けた。

「端的に言うと、君はモテモテちゃんだってこと。ファンクラブまがいのキモい集団もいるってのに…こんだけ悟られてないとあいつらも報われないねぇ…。」

「はぁー」とため息をつく美郷を見て、困ったように朱璃は呟く。

「そんなことないよ、一度も誰からもそういったこと言われたことないし。華ないし、チビだし。」

美郷は朱璃の全身をてっぺんからつま先まで眺め、心の中で「一回巫女さんの格好して欲しい！」とか何とか言ってた野郎どもに少しだけ同意した。

見事な長い黒髪に袴姿という凛々しい姿ながら、小さな身長の影響か、愛らしい顔立ちからか、朱璃には守ってあげたいという思いを女の自分に起こさせるほど儚い魅力がある。

「そういう無理に自分を卑下するところは直したほうがいいよ？朱璃は可愛い。そこは私が自信持って言うよ。」

ニカッと美郷は笑い、朱璃は「ミサは本当にホスト顔負けの天然タラシだと思うよ…。」と照れながら言った。

「へへっ褒め言葉と受け取っておくよ。…ってあー綾部先輩の話が…っ。」

と言いかけた美郷の頭上から鋭いチョップが落ちてきた。

「…っていてぇ！！！」

チョップが飛んできた先には先輩であり、副部長の綾部琴深（アヤベ コトミ）が般若のような顔をして仁王立ちをしていた。

普段から表情が乏しい綾部から静かな怒りのオーラが出ているのを確かに下級生二人は見た。

「丹岡（ニオカ）、私は貴様に明海を呼んでくるように言ったはずだが…？」

恐ろしい。

指導が厳しくて嫌われている鷹槻（タカツキ）なんて目じゃないくらい恐ろしい。

しかし、こんな状況下でも先生などから叱られ慣れている美郷は

「ちぇ、良いじゃないですか。少し友人として雑談してたんですよ。副部長は生真面目過ぎるんですよ。まぁ、生真面目故に的狙ってる

時の集中力と眼光は凄いですよねぇー。」

と茶化した。

相手にするだけ無駄だと悟った綾部はとてつもなく重いため息をこれ見よがしに一つ吐き、

「とりあえず、今私が用があるのは明海だ。貴様は帰れ。」

ヒラヒラと美郷は手を振り、退場するために歩き出した。

「ヘイヘーイ。朱璃をとって喰っちゃ駄目ですよー。じゃーね朱璃、また明日ー。」

青筋を立てながら綾部が振り向いた時には美郷の姿は無かった。

「…明海。」

「はい？」

「アイツの友人は疲れないか？」

「いえ、そんなことは…。」

苦笑する朱璃を見て綾部は「この子は本当に心が広いんだな」と内心感心していた。

1話　弓引く少女（後書き）

日常パートは次まで続きます。
展開遅くて申し訳ない。

知識不足による記述ミス、誤字脱字に気をつけて参りたいと思います。
不定期更新になる予定です。

2話　落下開始

朱璃は商店街を足早に歩いていた。
普段はより早く帰れることを重視してこの商店街は通らないのだが、夕食の材料を手に入れるためにこちらの道を選んだ。

（今日は何を作ろうかな。金曜日だし、少し手が込んだものでも良いかな。）

朱璃には両親がいない。

母は高校入学前の、桜が咲く少し前に職場から消えた。
とある企業で派遣社員として事務の仕事に就いていたが、昼休みの時間が過ぎても職場に戻らず、そのまま行方知れずになった。

一時期「何処かで自殺した」だとか、「子供見捨てて男と逃げた」だとか、信じられないくらい酷い憶測が親類の間で話題に上っていた。
元々母は実家に碌に帰らない人物で、親とも上手くはいっていなかった。
昔、過度の期待をかけられて育てられ、言うことを聞かなければ虐待紛いのことまでされていたらしく、それが厭になって家を飛び出したらしい。

その母の娘である朱璃は冷遇され、親類一同から「蛙の子は蛙」と言わんばかりの軽蔑に満ちた目でジロジロと嘗め回すように見られた。

それでも朱璃はそういった冷たい視線に耐え、警察の事情聴取にも応じた。
幸運だったのは、父が残してくれていたマンションと財産があったことだった。

父は朱璃が生まれる前に死んだと母は言っていた。
何処か遠くを見つめながらそう語る母に対してそれ以上父のことが聞けず、詳しくは知らなかったが、母の愛しそうな語り口から、母が父を心から愛していたことは見て取れた。
だから、「男を作って逃げた」という憶測は絶対ありえないと思ったし、そのことを噂する親類を目にした時は思わず、「そんなことはありえません！」と声を張り上げてしまった。
まさか、朱璃に聞かれていたとは思わなかったのか、親類達はバツが悪そうなにやけた笑みを浮かべながら逃げるように去っていった。

今は一人でマンション住まい。
時々朝起きて母を探す自分がいて、でもいない現実にぶつかる。
父が残してくれていた貯蓄はあったのに、母は親らしく2人の家庭を支えたいと言って仕事をしていた。

…母が仕事に出かけるのを止めていれば、母は今でも自分の傍にいたのだろうか？

朝が来るたびにこの疑問は朱璃の心を抉った。

（あと海老とマカロニ買って…グラタンとか作ろうかなぁ。）

ぼんやりと夕食のプランを考えていると、何かが目の前を横切った。

（…光？）

眩い青みがかった緑の光が左手の路地に消えていく。

気のせいか、人型だった気がする。

（もしや、幽霊！）

目を輝かせ、朱璃は光が消えた路地へ入っていく。

意外にも朱璃はオカルトやら、ホラーやらが大好きで、夏によくテレビでやっている心霊番組は欠かさず見ているのだ。

この目で超常現象を見るチャンス！と勢い付き、全く怯える様子も無く踏み込んでいく。

夕闇が迫る商店街の路地は薄暗く、足元がおぼつかなくなる瞬間もあった。

周りはこれといって目立つ店も無く、その多くがシャッターが下りていて、一種の迷路のようだった。

（何処へ行ったんだろう、あの光）

歩けども歩けども先程見た光は見つからない。

朱璃は次第に自分が幻か何かを見たのではないかと思い始めた。
最後には袋小路に出て、結局光を見つけることができなかった。
（やっぱり見間違いかぁ…）
少しがっかりして引き返そうとした瞬間、何かに足首を掴まれた。
「え…？」
躓いたのではない、掴まれたのだ。
それも人の手の形状をしたものに。
視界が回転し、ブレる。
アスファルトの地面に叩きつけられることを感じ、本能的に手で頭を守ろうとした朱璃だったが、次の瞬間感じたのは水の中に落ちたような冷たさだった。
水溜り？

でも昨日も今日も雨なんて。

疑問を感じたのは一瞬で、つぶっていた目を開くとそこは。

空中だった。

「…え？」

2話　落下開始（後書き）

ホラー良いですよね。
思ったよりも前半が重い話になってしまいました。

3話　アリスが一名ご到着

未だかつて上げたことない凄まじい悲鳴を上げたのは最初の5分だけで、そこから先は喉が潰れて声なんて出なかった。

今は変に頭が冴えていて、走馬灯のように脳内を巡る今までの出来事を整理しようと努力していた。

今日は放課後に部活にでて…帰り際にミサが話しかけてきて…綾部先輩から次の大会の話をしてもらって…帰り道に夕飯の買い物のために商店街を通ったら幽霊みたいなのが…。

自分は何かに足を捕まれてこけたはずなのだ。地面に激突するかと思えば、次の瞬間には空中、以降落下するのみである。

何か、全然地面らしいものも見えないし（見えても衝突するので困るが）、私はどうなってしまうのだろう？

不思議の国のアリスの話の冒頭にもこんな状況はなかっただろうか。

―兎を追いかけたアリスが落ちた穴は異常に深く、最終的には彼女の夢の国に繋がっていた―

私のこれも夢なのかな。
落下する夢は実は良いことを知らせる夢なのだと昔誰かから聞いたが、もう十分堪能したのでいい加減目覚めて欲しい。

落下を始めて何分経ったのだろう。
意識がだんだん遠退いていくのを感じた。
落下している姿勢のせいで頭に血が上り、クラクラする。

…このまま私死ぬの？

だんだん全てがどうでもよくなってくる。

母がいなくなったあの日感じたあの気持ちが蘇ってきた。

私は今一人だ。
それ以上でも以下でもない。

グッ

「え！？」

いきなり急ブレーキをかけられたように落下スピードが低下した。
かかる重力がドンドン減っていく。
それはまるで着陸のために逆噴射を行う飛行機のようだった。

…終わりが近い…？

直感的にそう感じた。
落ちて行く先に微かに何かが見えた。
陸地…そして巨大な塀で囲まれた都市。

「あそこを目指してるんだ…！」

意思ある何かに導かれるようにまっすぐに街の中心地に下りていく。
そして地面がいよいよ近づいてきた。

「え…、ちょ、ちょっと、これはもしかして…！？」

地面に激突死するほどの速度はもう出てはいなかったが、問題は落下地点。
何か大きな教会風の建物が見える。
聖堂らしい天井部分には豪勢な円状のステンドグラスが嵌め込まれている。

（このままじゃ、ステンドグラス破っちゃう…！）

混乱してじたばたするも、軌道を変えることができない。

そしてついに。

ガッシャーンという大きな音を立てて朱璃は予測通り見事にステンドグラスをぶち抜いた。

「…っ」

パリンパリンとガラスが砕ける音が耳元で響く。
必死で顔を腕で覆い、ガラスの破片から身を守る。
ガラスに反射した色とりどりの光が視界の端で微かに視認され、やがてドサッと地面に投げ出される感覚がした。

「うー…あいたた…。」

ゆっくりと顔を覆っていた腕を外し、少し打った腰に手を伸ばす。
細かい切り傷は幾つかあるみたいだが、大けがはしなかったようだ。

ふぅ…。

と一つ溜息を吐く。

しかしすぐにこの着地地点の異様さに気づいてしまう。

（あ…え…ここ…どこ…？）

何か恐ろしいくらい辺りが静かだ。
誰もいない静寂ではなく、大勢がいて、誰もが押し黙っている時のような沈黙。
まるで、鬼教員の鷹槻にクラス規模で説教くらってる時と同じような。

嫌な予感がして朱璃はパッっと顔を上げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7367l/

彼の岸

2010年10月10日20時34分発行